

小学生英語スピーキングテストの開発

——評価項目に焦点をあてて——

國 本 和 恵

A Study of Assessment Items in Speaking Test for Children

Kazue Kunimoto

Abstract

This study examined the assessment items used when evaluating the English speaking ability of Japanese Children. First, seventeen 1st to 6th graders of elementary schools were asked what they wanted to know about the results after taking a speaking test. Three children showed their strong intent and willingness to study English, two needed praise, and one wanted to know about his ability. However 11 children could not express their opinions. Next, 41 parents whose children learned English in elementary school were asked to judge which types of assessment items could inform parents and children about English speaking abilities. Willingness to speak, pronunciation, speaking attitude, test-taking attitude, and test score were judged to be high-need items when informing parents and children. On the other hand, intonation, vocabulary, fluency, grammatical competence, and average score in each grade were judged to be necessary items for informing parents, but not very necessary for informing children. Finally, 23 parents were asked to

describe evaluation criteria for assessment items in speaking tests for children. Parents wrote many descriptions about evaluation criteria and desires for tests. The numbers of descriptions for the high-need items were greater than those for the low-need items. Some evaluation criteria for items were drafted on the basis of the parents' descriptions.

1. はじめに

本研究は、小学生対象の英語スピーキングテストの開発を目的とし、テスト参加者の小学生が理解可能な診断的情報を求めて、評価項目について検証する。

アセスメントとしての評価は、小学校における外国語活動の展望を探る上で必要不可欠である。学習効果があらわれるのが時間的に一様でなく、学期や学年を超えて長期的に育むべき内容もあることから、同じ項目であっても繰り返しデータを収集する機会を持つことは、児童の発達を知るためにも重要である（文部科学省，2009）。このように、教育データは、授業改善やフィードバックに利用されている。その反面、テスト参加者に対して、どのような診断的情報をフィードバックすることが望ましいかという議論は、十分とはいいがたい。

2. 先行研究

小学校外国語活動の目標は、外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるといふ、以上の3つの柱を踏まえた活動を統合的に体験することで、中・高等学校等における外国語科の学習につながるコミュニケーション能力の素地をつくらうとするものである。（文部科学省，2008）。学習指導要領の改訂により小学校外国語活動が新設され、平成23年から全国の公立小学校で

一斉に、年間35単位時間数が確保された。評価については、上記の小学校外国語活動の目標の3つの柱を基にして様々な手法を利用しながら統合的に行うことが求められる。評価例として、①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める目標に関しては、ALT (Assistant Language Teacher) の母国や中国、オーストラリアなどの国々の小学校では、どのような教科が学習されているかを興味を持って聞こうとすることを、行動観察によって評価する。②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るについては、将来つきたい職業について、積極的に相手にたずねたり答えたりすることを行動観察によって評価する。③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるについては、1から10までの数を言いながら進んで歌おうとすることを、行動観察で評価する(文部科学省, 2009)。

「興味を持って聞こうとする態度」「積極的に相手にたずねたり答えたりする態度」「進んで歌おうとする態度」が、具体的にどのような子どもの態度を指し示すか、指導要領では明らかにされていない。担任にとって、子どものどのような態度を評価すればいいのかかわりにくい状況にある。税所・松宮(2011)は、小学校教員にアンケートをとり、評価基準と具体的な子どもの姿対応表を作成し、一部の教員に利用されている。例えば、「自分の思いをより性格に伝えるために、言葉で工夫して話そうとしている」評価基準については、以下の3つの態度を評価できる態度としている。1. 相手が聞き取れる声(大きさ、明瞭さ、声のハリ、スピード)で話している。2. 伝えたい箇所を強調して話している。3. 伝わっていないときには、繰り返したり、表現を変えたりして言い直している。

評価は教育において重要な課題であり、上記のように授業中の子どもの態度の評価だけではなく、小学生のスピーキングを評価する研究もなされている。

小学生対象の英語スピーキングテストの開発において、実施容易性、評価者、評価容易性、評価項目、波及効果(テスト自体が英語に対する

意欲を促進する), 診断的情報の検証が必要であるとされている(國本, 2008; 文部科学省, 2009)。診断的情報は, 評価項目を評価することによって得られる。教育データを得ることを目的とした場合, 英語教育の専門家, 例えば, 大学の教員だけが評価するのではなく, 小学校担任が容易に評価できる評価項目である必要がある。また, 評価項目とその評価によって得られる診断的情報は表裏一体といえるが, テスト参加者へ豊かなフィードバックを与える診断的情報を得るために, 評価項目の評価基準はどうあるべきであろうか。

先行研究によると, 小学生対象の英語スピーキングテストにおいて, 大学の教員と英語母語話者が評価した研究では, 「質問に対して十分適切に答えることができる。」を評価基準として, 5段階評価されている(石濱・西田, 2007)。同じく大学の教員, 英語教師, 英語母語話者が評価した研究では, “Use a limited number of isolated words, two- to three-word phrases, and/or longer memorized expressions.” “May attempt to create sentences, but is not successful. Long pauses are common.” という評価基準を含めた9段階評価されている(兼重・近藤, 2004)。小学校担任とALT (Assistant Language Teacher) を評価者とした3段階評価では, 「外国の人に理解できる英語を使って, 的確な反応の早さで, 正確に答えている。」が評価基準とされている(佐貫・山藤・福田, 2005)。Kunimoto (2009) は, テスト参加者にヒント(スピーキングモデル)を提示する方法を取り入れ, 佐貫・他の3段階評価基準, そして, 石濱・他の質問に対する回答の適切さをもとに, 「ヒントなしで, 適切な回答。」を評価基準とする3段階評価が採用している。

以上の評価基準をもとにすると, 小学生に与える診断的情報は, テスト得点に加えて, テスト参加者のパフォーマンスが高い場合は, 「質問に対して十分適切に答えることができる。」 “You can use a limited number of isolated words, two- to three-word phrases, and longer memorized expressions.” “You attempt to create sentences, but is not successful. Long pauses are common.” 「外国の人に理解できる英語を使って, 的確

な反応の早さで、正確に答えている。」「ヒントなしで、適切な回答できる。」となる。しかし、これらの診断的情報は、小学生にとっては難解であり、コミュニケーションを図る喜びや意欲を育む診断的情報とはいいたがたい。

テストから得られた評価をテスト参加者に知らせることは、学習の一助となる。さらに、情緒的サポート、満足感、解決策などの心理的サポートを与える診断的情報は、テスト参加者に対して、豊かなフィードバックを与える（小杉、2007；國本、2008）。英語スピーキングテスト参加者にフィードバックを与えるのであれば、テスト得点とスキルだけに焦点を当てるのではなく、外国語を通してコミュニケーションを図る喜びや意欲を育む診断的情報であることが望ましい。

一般的に、教育データを得る目的で実施される英語スピーキングテストでは、研究者や小学校英語指導者によって、評価基準が作成される事例が多い。テスト結果など教育データは、保護者を含めた関係者で、なぜその結果がえられたのかを吟味していくことが大切であると示唆されている（文部科学省、2009）。テスト参加者の小学生が理解しやすく、意欲を育む診断的情報が得られる評価基準を作成するために、子どもの一番の理解者である保護者の協力を得ることが可能ではないであろうか。

3. 目 的

本研究は、英語スピーキングテストの開発を目的として、小学生が理解できる診断的情報、そして、評価項目の評価基準を求めて、以下の3点を検証する。

1. テスト参加者の小学生が知りたいと感じる、英語スピーキングテストの診断的情報を調査する（調査1）。
2. 英語スピーキングテストの評価項目を、保護者がどの程度必要と判断するかを検証する（調査2）。

3. 保護者の自由記述によって、英語スピーキングテストの評価項目の評価基準、そして、フィードバックすべき診断的情報を検証する（調査3）。

4. 調査1 小学生へのインタビュー

小学生が知りたいと感じる、英語スピーキングテストの診断的情報を調査するため、インタビューを実施した。

4.1 手続き

Kunimoto (2009) の英語スピーキングテストを受けた小学1～6年生17名（平均2.8学年， $SD=1.5$ ）が参加した。テスト終了後、小学生に「英語スピーキングテストを受けて、どんなことを知りたいですか。」とインタビューした。

4.2 結果と考察

「英語スピーキングテストを受けて、どんなことを知りたいですか。」という質問に対して、3名（小1，小3，小4）が「英語をもっと知りたい」と英語に対する意欲を述べた。テストの波及効果によって、学習意欲が高まったと考えられる。2名（小1と小2）は、「よくできましたとほめてほしい」と述べた。テスト参加者が、ほめ言葉を含む診断的情報を受け取りたいという期待感を持っていると思われる。さらに、1名（小6）が「どういう結果でも自分の実力がわかればいい」と回答した。インタビューから、テスト参加者には、テストを受けたことによる学習意欲の高まり、「ほめられたい」という期待感、そして、テスト得点を知りたいという気持ちがあることが示唆された。

しかし、テスト参加者17名のうち11名は、「ありません」（6名）、「わからない」（5名）と回答した。このように、「英語スピーキングテストを受けて、どんなことを知りたいですか。」という質問をされたとき、

自分の意見を十分に表現するには、小学生の言語能力は未成熟だといえる。小学生にふさわしい診断的情報が何なのかを探るため、保護者の協力が必要であると思われる。

次に、調査2において、小学生以上の子どもを持つ保護者を対象として、評価項目の必要度を調査した。

5. 調査2 評価項目の必要度

小学生対象の英語スピーキングテストに関して、保護者に評価項目の必要度を判断させるため、調査を行った。

5.1 手 続 き

小学生以上の子ども（英語学習経験者）を持つ保護者41名が参加した。英語スピーキングテストの結果を、子どもが見る場合と保護者見る場合において、評価項目の必要度の判断を保護者に求めた。調査した評価項目は、テスト得点、学年平均テスト得点、流暢さ、英語の発音、イントネーション、語彙力、文法力、テスト態度、話す態度、話す意欲の10項目であった。調査は、質問紙法を用いて、5件法（5：とても必要である、4：必要である、3：どちらでもない、2：必要ではない、1：全く必要ではない）で実施した。教示は、以下の通りであった。

小学生対象の英語スピーキングテストの評価において、評価項目としてどんな項目が適切だと思われますか。

A. お子さんがテスト結果をご覧になった場合

B. 保護者の方がテスト結果をご覧になった場合

の両方にお答えください。以下の評価項目について、必要度を「とても必要である」「必要である」「どちらでもない」「必要ではない」「全く必要ではない」の5段階評価してください。お友達と相談されなくて、ご自分のお考え通りに印をお付けください。

5.2 結果と考察

保護者による評価項目の必要度判断（子どもが見る場合と保護者が見る場合）の平均値を表1に示した。SPSS 14.0 J for Windows を用いて、英語スピーキングテストの結果を見る人（子ども／保護者）を独立変数として、評価項目（テスト得点、学年平均テスト得点、流暢さ、英語の発音、イントネーション、語彙力、文法力、テスト態度、話す態度、話す意欲）を従属変数として、1要因の分散分析を行った。

表1 評価項目必要度の平均値

評価項目	子ども		保護者		F
	Mean	SD	Mean	SD	
話す意欲	4.4	0.8	4.5	0.7	2.35
発音	4.3	0.8	4.4	0.6	2.68
話す態度	4.3	0.9	4.3	0.7	1.30
テスト態度	4.2	1.0	4.3	0.8	1.84
テスト得点	4.0	0.7	4.1	0.6	2.32
イントネーション	3.9	1.0	4.2	0.6	7.98 **
語彙力	3.9	0.7	4.1	0.6	6.54 *
流暢さ	3.7	0.8	4.1	0.6	12.54 **
文法力	3.7	0.9	3.9	0.6	3.30 *
学年平均テスト得点	3.6	0.9	3.9	0.7	5.35 *

注：中位点は3.0。* $<.05$ 、** $<.01$ 。自由度は1, 40。

分散分析の結果、話す意欲、発音、話す態度、テスト態度、テスト得点の5項目の必要度判断の平均値は、子どもが見る場合と保護者が見る場合の両方において、「必要である」という判断の4.0以上と高く、さらに、両者の平均値に有意差がなかった。このことから、子どもが見る場合と保護者が見る場合の両方において、これら5項目は必要な評価項目だと保護者に判断された。これらの高必要度評価5項目のうち、話す意欲、話す態度、テスト態度の3項目は、意欲と態度に関連する評価項目であった。積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図

ることが小学校外国語活動の目標とされている。保護者も英語に対する意欲や態度が、子どもの英語学習において重要であると判断していた。

しかしながら、イントネーション ($F(1, 40) = 7.98, p < .01$), 語彙力 ($F(1, 40) = 6.54, p < .05$), 流暢さ ($F(1, 40) = 12.54, p < .01$), 文法力 ($F(1, 40) = 3.30, p < .05$), 学年平均テスト得点 ($F(1, 40) = 5.35, p < .05$) の5項目は、子どもが見る場合と保護者が見る場合、両者の必要度判断の平均値に有意差があった。これら低必要度評価項目は、スキルに関する評価項目であり、保護者が見る場合においては、必要度がおおよそ4.0前後と必要な評価項目だと判断されたが、子どもが見る場合は、保護者より必要度が低いと判断された。これらの評価項目をもとにした診断的情報は、「イントネーションが良い／悪い」「語彙力が高い／低い」「流暢に話すことができる／できない」「文法力が高い／低い」であり、スキルに関するこれらの診断的情報は子どもが理解しにくい、と保護者が判断したと考えられる。

以上のことから、小学生が英語スピーキングテストの結果を見る場合、診断的情報のうち意欲と態度に関連する評価項目は必要であると保護者に判断された。テスト得点も子どもにとって必要な情報であるが、学年平均テスト得点は保護者には必要だが、子どもには必要ないとみなされていた。スキルに関する評価項目のうち、発音は子ども、保護者の両者に必要な評価項目であるが、イントネーション、語彙力、流暢さ、文法力は、子どもが見る場合、保護者の場合と比較すると、必要度が若干低いと判断されていた。

次に、調査3において、子どもが理解できる診断的情報を得るため、評価基準について、保護者に自由記述を求めた。

6. 調査3 評価項目の評価基準

小学生対象の英語スピーキングテストにおいて、テスト参加者の小学生が理解できる診断的情報を得るための評価基準を求めて、調査を実施

した。

6.1 手続き

小学生以上の子ども（英語学習経験者）を持つ保護者23名が参加した。調査3の評価項目は、調査2で扱った10項目（テスト得点、学年平均テスト得点、流暢さ、発音、イントネーション、語彙力、文法力、テスト態度、話す態度、話す意欲）であった。小学生が英語スピーキングテストの結果を見る場合の診断的情報として、適切な評価の自由記述を求めた。教示は、以下の通りであった。

小学生の理解力を考えると、成人に与える助言は小学生には、難解で理解できません。英語スピーキングテストにおいて、どのような表現やどのような点についての評価であれば、お子さんに適切だとお考えになりますか。具体的にご記入ください。お子さんの立場でお答えください。テストの評価にどのような言い回しが適切か知りたいと思いますので、「こんな表現だったらお子さんに分かりやすい」とお考えの表現がありましたら、お知らせください。よろしく願います。

6.2 結果と考察

6.2.1 記述数の分析

調査参加者の自由記述は、記述内容によって、評価基準、ほめる要望、テストへの要望、指導への要望、その他のコメントに分類した。調査参加者1人の記述に複数の記述内容が含まれる場合、それぞれ1と数えた。例えば、話す態度に関する自由記述として、「こうしたらもっといいよ。大きな声で話す。目を見て話そう。ほめてほしい。」という記述があった場合、評価基準を1、ほめる要望を1と数えた。記述内容別の評価項目の記述数を表2に示した。

記述数に関して、低必要度評価項目のうち学年平均テスト得点は16と

表2 評価項目の記述数

評価項目	記述内容						
	記述数	評価基準	ほめる要望	テストへの要望	指導への要望	その他のコメント	
高必要度 評価項目	話す意欲	12	6	3	3	0	0
	発音	18	6	1	1	5	5
	話す態度	9	7	2	2	0	0
	テスト態度	12	5	2	5	0	0
	テスト得点	17	14	2	1	0	0
低必要度 評価項目	イントネーション	5	3	0	0	1	1
	語彙力	5	2	0	0	0	3
	流暢さ	6	4	1	0	0	1
	文法力	3	1	0	0	1	1
	学年平均テスト得点	16	3	0	5	0	8

注：回答者数は23名。

多かったが、他の評価項目（イントネーション、語彙力、流暢さ、文法力）は3から6であった。それに対して、高必要度評価項目の記述数は、低必要度評価項目と比較すると、9から18と多かった。

記述内容に関して、低必要度評価項目には、ほめる要望とテストへの要望の記述がほとんどなかったが、高必要度評価項目は5項目全てにはほめる要望とテストへの要望の記述があった。調査2において、子どもが見る場合と保護者が見る場合の両方において必要だと判断された高必要度評価項目は、記述数が多く、記述内容も多様であり、高必要度評価項目に対する保護者の意識の高さを反映していた。さらに、高必要度評価項目全てにはほめる要望があったことから、子どもにとって必要だと保護者が判断した、高必要度評価項目の診断的情報に、子どもの意欲を高めることができるように、ほめ言葉を求めたと思われる。低必要度評価項目の中では、唯一、流暢さだけにほめる要望の記述があったが、イントネーション、語彙力、文法力、学年平均テスト得点にはほめる要望がなかった。低必要度評価項目は、子どもにとって必要度が高い診断的情報

だと保護者が意識していないため、ほめる要望がなかったのだと思われる。

6.2.2 記述内容の分析

次に、子どもが理解できる評価基準を得るため、保護者の自由記述を分析した。

(1) 意欲と態度に関連する評価

話す意欲の評価基準として、「もっと自信をつけるような表現をおねがいます。」「話そうとしている気持ちがよくわかった。」「元気よく、大きな声で、まちがってもはずかしがらずに話せているか、評価していただきたいです」「はずかしがらないで。とか、相手の目をみて など」「こうしたらもっといいよ。大きな声で話す。目を見て話そう。」「どんなことに気をつけて話せばよいのか。自信を持って話すには。」の記述があった。「大きな声で話す」「相手の目をみて話す」は態度に関連する評価基準であることから、保護者は態度と意欲を混同していたと考えられる。保護者の記述をもとにして、話す意欲は、「自信を持って話すことができる」を評価基準とした。

話す態度の評価基準として「相手に伝えようとする努力を見て欲しいです」と記述されていたが、この記述は話す態度に関するというより、話す意欲に関する評価基準である。相手に伝えようとする意欲を評価するためには、どのような評価をすればいいのであろうか。

相手に伝えようとする意欲については、記述の中に「元気よく、大きな声で、まちがってもはずかしがらずに話せているか、評価していただきたいです」「話そうとしている気持ちがよくわかった」とあったことから、間違っても（文法的ミスがあったとしても）、話し相手に伝えようとするのが評価対象となるのではないと思われる。

例えば、テスト項目の

“How old are you?”

に対して

“It’s 10.”

という回答を、文法的側面に重点を置いて評価すると、例えば Kunimoto (2009) のコミュニケーションとしての適切さの3段階評価 (3点:適切な回答, 2点:ヒントの後, 適切な回答, 1点:ヒントの後, 無回答) では、適切な回答ではないため1点となる。しかし、「文法的に間違いがあっても、相手に伝えようと努力して話すことができる」という観点から評価すると、回答 “It’s 10.” から年齢が10歳であるが伝わる。このことから、コミュニケーションへの積極的な態度、すなわち、話し相手に伝えようとする意欲の評価が可能となる。話す意欲「文法的に間違いがあっても、相手に伝えようと努力して話すことができる」の評価を加えた3段階評価を、表3に示した。

表3 話す意欲の評価を加えた評価基準

評価点	評 価 基 準
3	ヒントなし正解。 Yes. No. 名詞だけの回答であってもコミュニケーションとして成り立ち、相手に意図が伝わっていれば正解。文法的間違いがある場合は、3としないで2とする。
2	ヒントあり正解。 文法的間違いがあっても正解 (例, <i>I’m rainy.</i> 自分の年齢で <i>It’s 10.</i> など。この場合は、「文法的に間違いがあっても、相手に伝えようと努力して話すことができる」に印をつける。)
1	間違い。無回答。“ <i>I don’t know.</i> ”と発言。

また、テスト参加者の回答を「正解」か「不正解」だけで判断した場合、「不正解」の判断が続くと評価者の心理的負担が大きいが、表3の評価基準に従うと、話し相手に伝えようとする意欲を同時に評価できるため、評価者の心理的負担が軽減すると思われる。

テスト態度の評価基準として、「最後まで聞こうとする力をみて頂きたい」「～にした方がいいよとか (～しなさいと命令的でなく) いった方がいい」、同じく、テストへの要望として「授業の時と同じ感じでリラッ

クスできたらいいと思います。」「良かったところをほめて。注意するところもやさしく。」「何事も真剣に取り組む姿勢を身につけてほしいのでありのままを伝えていただきたいです。」「リラックスするようなテストを。」という記述があった。保護者は、子どもがリラックスして受けることでできるテストの実施、そして、子どもが受け入れやすいテスト態度の診断的情報を希望していた。記述をもとにすると、テスト態度は「相手の話を最後まで聞くことができる」が、評価基準となると思われる。

話す態度の評価基準として、「相手に伝えようとする努力を見て欲しいです」「はずかしがらないで。とか、相手の目を見て など」「こうしたらもっといいよ。大きな声で話す。目を見て話そう。」「ほめてほしい」という記述があった。保護者の記述をもとにして、「大きな声で話すことができる」「相手の目を見て話すことができる」という評価基準で評価すると、子どもが理解できる、話す態度の診断的情報となると思われる。

(2) 得点に関連する評価

文法力の評価は表3に示した評価基準によって、文法的に間違いがなければ正解として評価し、得点は数値として提示する。文法力の評価基準として「何をどうしたらかったか（正解だったか）。何がよかったか」、コメントとして「必要ならしっかりと教えてほしい」という記述があった。得点に加えて、テスト参加者に示す診断的情報を求めたが、他の項目のような具体的な記述がなかった。

テスト得点に関しては、17の記述のうち10の記述に、数値の提示に賛成する記述であった（「得点の数字があると子どもに評価としてわかりやすい」「10点満点が100点満点で。数字なら本人にわかりやすい」）。また、3段階評価を希望する記述（「ABC「よくできる」「できる」「がんばろう」などの評価と言葉で補足」）もあった。テスト得点は、数値での表示が適切だと思われる。それに加えて、学習意欲を損なわないように、「がんばろう」などの言葉での補足が望まれていた。

学年平均テスト得点について、11の記述のうち9の記述において学年平均を希望する記述であった（「同学年のお友達がどれくらいの点を取っ

ているかがわかると目安になる。)。反対意見として、「小学生にはわかりにくい」というコメントがあった。提示の仕方として、「グラフだったらわかりやすい。平均と本人の点」という意見があった。学年平均テスト得点は、得点を文章化した診断的情報で示すのではなく、数値での提示が希望されていた。得点に加えてグラフという視覚情報が、得点の評価の理解を助けると考えられる。

(3) スキルに関連する評価

調査2において、スキルの中でも発音は高必要度評価項目と判断され、他のスキル、イントネーション、語彙力、流暢さ、文法力は低必要度評価項目と判断された。調査3の自由記述数では、発音は他のスキルと比較して、記述数が多く、保護者の関心の高さが反映されていた。発音の評価基準として、「相手が聞き取りにくいのか」、指導の要望として「正しい発音になるよう、間違っていたら正してほしい」、テストへの要望として「全てにおいて、正解したらしっかりほめて」、コメントとして「学年があがるにつれてきちんと話せるようになる」と記述されていた。テスト中に発音の間違いを正すことはできないので、テストの評価基準というより、普段、指導中に子どもが発音を間違えたらすぐに正して欲しい、という要望が記述されていた。保護者の記述をもとにして、「相手が聞き取りやすい発音ができる」が評価基準になると思われる。

イントネーションについて、評価基準として「相手が聞き取りにくいのか」、指導への要望として「しっかりと正してほしい」と記述されていた。保護者の記述から、イントネーションについて「相手が聞き取りやすいイントネーションで話すことができる」という評価基準となると思われる。

語彙力については、評価基準として「単語をどれだけ覚えているか」、「英語の言葉をたくさん知っていますね」、コメントとして「天気や果物はいえるけれど、今回のスピーキングテストは難しかった」、「すくなければもっとがんばって覚えようとか楽しみながら語彙力が増えるようにしてほしい」という記述があったが、他の項目のような評価基準の具体

的な記述がなかった。語彙力の評価は「語彙がある」「語彙がない」という2件法で判断しにくく、語彙を英語スピーキングテストで測定することは難しい語彙量は、英語スピーキングテストとは切り離れた、別のテストによる測定が適切だと思われる。

流暢さの評価基準について、「点数だとわかりにくいので、○か×かで。アバウトですが、できているかないかでいいと思います」「すぐに答えをこたえられるテンポのよさ。答えも1つだけ、単語だけでなく、これも会話をつづけていける力。」「スムーズに話せています。相手にわかりやすく話せています。頭に浮かんだことを英語で素直にそのまま話せています」という記述があった。以上のことから、「会話がつづくよう、テンポよくスムーズに話すことができる」が流暢さの評価基準として、小学生に理解しやすく具体的であると思われる。

小学校学習指導要領において、外国語活動は文法事項の習得というよりコミュニケーションへの積極的な態度の育成が目標であると示唆されている。調査2の必要度判断と調査3の自由記述から、コミュニケーションへの積極的な態度の評価を保護者も希望していることが示唆された。調査3の自由記述から、語彙力と文法力に関して、具体的で子どもが理解できて、かつ、評価しやすい評価基準を得ることができなかった。

表4 診断的情報の評価基準

評価項目	評価基準
話す意欲	自信を持って話すことができる 間違っても相手に伝えようと努力して話すことができる
テスト態度	相手の話を最後まで聞くことができる
話す態度	大きな声で話すことができる 相手の目を見て話すことができる
発音	相手が聞き取りやすい発音ができる
イントネーション	相手が聞き取りやすいイントネーションで話すことができる
流暢さ	会話が続くよう、テンポよくスムーズに話すことができる

調査3で得られた、保護者の自由記述をもとにした診断的情報の評価基準を表4に示した。話す意欲、テスト態度、話す態度、発音、イントネーションの評価は、スピーキングテスト終了直後に「できる」「できない」という2段階評価をすると、評価が容易となる。

7. まとめと今後の課題

7.1 ま と め

本研究は、外国語を通してコミュニケーションを図る喜びや意欲を育むことが可能となる、小学生にフィードバックすべき診断的情報を求めて調査を実施した。

調査1では、スピーキングテストを受けた小学生が、波及効果によって意欲を高め、また、英語スピーキング力を知りたい気持ちと「ほめられたい」という期待感を持つことが示唆された。調査2では、保護者は、小学生に知らせる診断的情報として、話す意欲、話す態度、テスト態度など、意欲や態度の関する評価項目の必要度が高いと判断していることが明らかとなった。調査3では、保護者の自由記述をもとに、小学生が理解できる評価項目の評価基準を作成した。本研究の評価基準によって、理解しやすく、意欲を育む診断的情報を小学生に与える、1つの方向性が示されたと思われる。

7.2 今後の課題

本研究は、小学生対象の英語スピーキングテストの開発を目的として、テスト参加者である子どもと保護者対象とした調査によって、子どもに示す診断的情報を作成した。診断的情報の作成が研究の終点ではなく、本研究の診断的情報を受け取った小学生が感じた気持ちや意欲を調査してはじめて、小学生がどの程度理解できるか、意欲を高めるかの確認が、さらに、テスト参加者の子ども情緒的サポート満足感、解決策の心理的サポートが可能となる、評価基準と診断的情報を求めて、さらに継続し

た調査が必要である。

引用文献

- 石濱博之・西田克裕 (2007). 「英語活動における「話すこと」に関する効果—どのくらい児童は既習の言語項目を表現できるか—」(小学校英語教育学会第7回全国大会発表資料)
- 兼重 昇・近藤千代 (2004). 「小学生の英語力に関する一考察：SOPA, ELLOPAを参考にして」『小学校英語教育学会紀要』, 第5号, 25-30.
- 小杉正太郎 (2007). 「企業内カウンセリングの現状と課題」(第12回広島大学心理臨床セミナー発表資料)
- 國本和恵 (2008). 「小学生英語スピーキング力テスト開発に関する考察」『広島女学院大学英語英米文学研究』, 第16号, 103-124.
- Kunimoto, K. (2009). The Speed of Responses as a Potential Rating Factor in English Language Speaking Tests for Children. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 20, 241-250.
- 文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京：東洋館
- 文部科学省 (2009). 『小学校外国語活動 研修ガイドブック』東京：旺文社
- 佐貫晃弘・山藤 満・福田夏子. (2005). 「小学校英語教育における評価の在り方」(日本児童英語教育学会第20回中国四国支部研究大会資料)
- 税所裕子・松宮奈賀子. (2011). 「外国語活動における『積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度』の評価のあり方—「評価基準と具体的な子どもの姿の対応表」作成と活用によって—」(日本児童英語教育学会第31回中国四国支部研究大会資料)